

ウェーバーとジンメル：二つの作品の一断面

著者	岡澤 憲一郎
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	48
号	2
ページ	119-124
発行年	2012-01-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000701

〔研究ノート〕

ウェーバーとジンメル

—— 二つの作品の一断面 ——

岡 澤 憲一郎

コロソ：を含む（ ）内の数字は、本文のあとに掲げた引用文献とそのページ数を示す。

1. 自責の念

2009年秋、「21世紀に蘇るジンメル理論」というテーマのもとで、ジンメル研究会の大会が東北社会学会研究会との合同で開催（東北大学）された。そのときに、廳茂の報告「G. ジンメルにおける第3アプリアリ論 — その思想的意味」を聴いていたら、わたしはいまだに自責の念にかられている。

ドイツの社会学者マックス・ウェーバー（1864-1920）は、ハイデルベルクで激論をかわした父がその翌月、つまり1897年8月に旅先で急逝してしまったのをきっかけに、三年半ものあいだ神経症に苦しめられた。入院と療養がつづいたので、もちろん大学の教壇に立つことはできなかった。そのかれが病氣からようやく回復したころ手にとったのが、六歳年長のゲオルク・ジンメル（1858-1918）の『貨幣の哲学』（G. Simmel, *Philosophie des Geldes*, 1900）であった。ちなみに、ウェーバーの妻マリアンネは、病氣回復後の夫について、つぎのように報告している。「かれはいまやコンラートの年鑑をも読み、その上、ジンメルの貨幣の哲学を読んでいます。」（7：266）『貨幣の哲学』の初版が出版されたのは1900年だから、おそらく1901年のころだろう。

それから数年後に、ウェーバーはよく知られているつぎの二つの論文を発表した。一つは、1904年の「社会科学のおよび社会政策的認識の『客観性』」（M. Weber, *Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis*, 1904）。もう一つは、1905年の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の『精神』」（*Die protestantische Ethik und der „Geist“ des Kapitalismus*, 1905）である。二つの論文がどのような点で『貨幣の哲学』の影響を受けているかについては、ほかの機会に詳しく述べた（13：174-180）。自責の念から解放されるために、ここでは改めて1905年の論文と『貨幣の哲学』の影響関係について、重要な点を、しかも一点だけをとり上げることにした。

2. ウェーバーのジンメル評

晩年のウェーバーは、全三巻からなる『宗教社会学論集』（M. Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 3 Bde., 1920-1921）の「緒言」のなかの注で、ジンメルの『貨幣の哲学』に

においては、『貨幣経済』と『資本主義』がしばしばまったく同一視され、即物的な説明をそこなうにいたっている」と酷評している（5：5）。また『経済と社会』（M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1921-1922）の第一部第一章「社会学の基礎概念」の「緒言」でも、「思念された『意味』」を「客観的に妥当な『意味』」から区別することによって、『社会学』（G. Simmel, *Soziologie*, 1908）および『貨幣の哲学』における「ジンメルの方法」からは離れてくると強調し、つぎのように記した。「ジンメルは、かならずしもこの両者を区別しないばかりでなく、しばしば故意にこれを混同している。」（6：1）かなり手厳しい批判である。これとおなじ趣旨の批判は、1913年の雑誌『ロゴス』第四巻に載った論文「理解社会学の若干のカテゴリー」（M. Weber, *Ueber einige Kategorien der verstehenden Soziologie*, 1913）においても見出される（4：253）。

ややさかのぼって、1908年に書かれたと推定されているジンメルにかんするウェーバーの遺稿によれば、もちろんかれは、ジンメルにとって、社会学が個人間の相互作用をとり扱う科学であることを認めている。しかしかれは、『相互作用』の概念が何かあいまいなものという特性をもっている」のは明らかだと批判的である。ウェーバーからいわせれば、相互作用の概念は広すぎるので、「一般に最大限の不自然さを用いてのみ、純粹に『一方向的な』、すなわち相互作用の何らかの要素を含んでいないような、他者によるある人間の影響を想像できる」（3：12）にすぎない。

プロテスタンティズムの倫理にかんする論文ではどうであろうか。ウェーバーはこの論文で、「資本主義の精神」という概念はベンジャミン・フランクリンにみられるような、「倫理的に色彩づけられた生活態度の格率」といったような意味で使われると述べている。そのさいかれは、その個所に注をつけ、注のなかでゾンバルトに言及しながら、ジンメルの『貨幣の哲学』にもふれた。ゾンバルトのばあい、資本主義的企業家の「倫理的側面」が「資本主義によってもたらされたもの」とみなされているのにたいし、ウェーバーは、それとは反対の仮説を立てておかななくてはならないと主張する。そしてウェーバーは、「このばあい、かれの思考過程はジンメルの『貨幣の哲学』（最後の章）のすばらしい描写と結びついている」（1：15）と書いている。ここからは、ウェーバーが『貨幣の哲学』の後半にあたる総合篇（前半は分析篇）のなかでも、第六章「生活の様式」をとりわけ高く評価していたことがわかる。かれは、『貨幣の哲学』の総合篇が近代の社会現象と文化事象を「それらの経済的な制約性と影響」という特殊な観点から分析した優れた叙述であると認めざるをえなかったようである。

こうしたウェーバーのジンメル評のうち、『宗教社会学論集』と『経済と社会』については、ジンメルは1918年に没してしまっただから反批判のしようがない。ジンメルはウェーバーとならんで、『ロゴス』の編者の協力者のひとりだったので、1913年の批判なら知っていたはずである。しかしかれは、それにはっきりと反論しているわけではない。ウェーバーの遺稿については、ちょうど1908年にウェーバー自身がジンメルをハイデルベルク大学の哲学正教授に推薦していて、採用の妨げになりかねないとの判断から公表しなかったのも、自己弁護しようにもできなかった。

3. ウェーバーからジンメルへ

プロテスタンティズムの倫理にかんする論文と『貨幣の哲学』の影響関係に目を転じてみよう。この論文との関連からみて、もっとも興味深いのは、ウェーバーが高く評価した『『貨幣の哲学』(の最後の章)のすばらしい描写』、つまり第六章「生活の様式」であり、そのなかでもとくに第一節と第三節である。ここでは、第三節については省略することにしよう。

ジンメルは第一節で、貨幣取引の頂点においては、「無色性」(Farblosigkeit)が職業内容の色彩になっているととらえて、現代の大都市には客観的な形式も決定的な活動も示さない数多くの職業があると指摘する。そしてかれは、あるカテゴリーの代理人、委託売買業者、さまざまな機会から何かをえて生活している大都市の無規定的なすべての人びとをあげている。かれらのばあい、経済生活においては、貨幣収益以外に確実にあげうる内容をもたず、絶対に固定されないものである貨幣が揺るぎない拠点をなす。こうしてかれは、問題のある人びとのばあい、知性が可能性を「狡猾」とよばれる形式においてもつとみて、つぎのように書いた。「これらの『職業』(»Berufe«)——それらにはまさに『神から使命をあたえられた存在』(»Berufensein«), すなわち人格と生活内容とのあいだの揺るぎない観念的な線が欠如している——へと傾くのは、もちろん一般に拠り所を失った人間たちである。」(10: 597) 世紀の転回期のころのベルリンにおける職業生活の一端を描き出しているだけに、きわめて印象的な一文である。

一方、ウェーバーはプロテスタンティズムの倫理にかんする論文で「ルターの職業観念」を考察するに先立って、つぎのように強調している。「なるほどドイツ語の『ベールフ』においてと同様に、おそらくなおいっそう明瞭には、英語の『コーリング』(„calling“)においても、ある宗教的な観念——つまり神からあたえられた使命(Aufgabe)という観念——が少なくともともに響いており、しかもわれわれが具体的なばあいにこの言葉に力点をおいて強調すればするほど、そのことがいっそう目立ってくるのは明白である。」(1: 35f.) つまりウェーバーは、ドイツ語のBerufと英語のcallingには日常的な世界における「職業」という意味のほかに、神の召命・使命・天職などの観念が「ともに」含まれているといたいわけである。

もちろん、Berufのとらえ方については、両者のあいだにかなりとはいえないまでも、多少の違いがみられる。しかし、プロテスタンティズムの倫理にかんする論文を読んだ人であれば、ジンメルが「職業」の本来の意味について補足説明している個所が病気回復後のウェーバーに有益な示唆をあたえたであろうことは、容易に推測しうるはずである。わたしはそう確信して、そのように書いた(13: 178)。

ところが、廳による報告のレジュメは、ジンメルのこの個所を含む一節が1907年の『貨幣の哲学』第二版で挿入されたものであるというきわめて重要な事実を明らかにしていたのである。さっそく調べてみた。わたしが読んでいるのは、『ゲオルク・ジンメル全集』(全二四巻)の第六巻に収められている『貨幣の哲学』である。それが1907年の増補第二版(Zweite, vermehrte Auflage)であるのはわかっていた。また『貨幣の哲学』には、いくつかの既発表の論文が修正ないし加筆されて収録されていることも知っていた。そうした修正や加筆はよくみられるもの

で、ほかの機会に明らかにしたように、ウェーバーでさえプロテスタンティズムの倫理にかんする論文を『宗教社会学論集』に収めるにあたって、1905年にはまったく使用されていなかったエートス (Ethos) という言葉を数多く導入しているほどである (12: 40-43)。

1900年の初版と1907年の第二版が内容的におなじだろうとおもい込んでしまい、わたしは、例の一文を引用するにあたって、第六巻の二人の編者デイヴィッド・P・フリスビーとクラウス・Ch・ケーンケがこの本の最後に付している入念な比較にもとづく Varianten (初版との違い) に注意を払わなかった。そこにははっきりと、ほぼ1ページ半に相当するさきの一節、つまり596ページの13行目から597ページの34行目までが初版にはないと記されているではないか (10: 777)。初版はいまでは手に入らない。名古屋学院大学の図書館にもなかったのも、図書館に依頼し、念のため初版の第六章第一節のコピーをとり寄せてもらった。やはり、その個所はみあたらなかった。

わたしの確信は完全に崩れてしまった。Varianten を確認せずに誤った推測をした自分を責めた。ジンメルにだまされたという思いにもかられた。ウェーバーが読んだのは初版だから、当然、そこにはジンメルが挿入した一節はなかった。そうであれば、Beruf に言及したさきの個所は、ジンメルが Beruf の二重の意味を強調しているウェーバーの論文をみて書き入れた可能性がある。ジンメルが読んだという確実な証拠はないので断定できないけれども、Beruf がもつ「ある宗教的な観念」については、ジンメルがウェーバーから影響を受けたのかもしれない。

4. ジンメルからウェーバーへ

ジンメルはたしか、第六章第一節の最初のところでも、Beruf についてふれていたはずである。それは、挿入されたさきの個所よりもややまえの部分ではなかったか。それに気づいて、第二版を読み返してみた。

ジンメルはそこで、われわれの活動の内容を形成する手段の数と系列の長さが「知性」に比例して発展すると指摘し、自然民族について報告されている情動への衝動性と没頭がかれらの目的論的な系列の短さと関連していると述べた上で、つぎのようにつづけていた。「いっそう高い文化においては、統一的に生活をつらぬく『職業』(„Beruf“)によって諸要素の凝集性 (Kohäsion der Elemente) がつくり出されるが、かれらの生活労働は、こうした凝集性をもっておらず、むしろ単純な関心系列から成り立っており、そうした関心系列は、かれらがその目標を一般的に達成するばあい、相対的にわずかな手段でそうする。」(10: 593) ジンメルは食料獲得のための苦労の直接性を例に出しているけれども、この苦労は、いっそう高い文化状態においては、多岐にわたる目的系列に席を譲るというわけである。

Beruf の両端につけられた強調符の形が異なっているとはいえ、この叙述は、初版の第一節第三パラグラフにおいても見出される (8: 457)。おそらくウェーバーは、「統一的に生活をつらぬく『職業』 („Beruf“) 」という表現に目を奪われたのではなかろうか。プロテスタンティズムの倫理にかんする論文では、関心が終始、職業観念に向けられ、考察の対象がフランクリンにみら

れる「資本主義の精神」からはじまって、ルター、カルヴァンおよびカルヴィニズム、プロテスタント諸派、カルヴァン派から発生したイギリスのピューリタニズムなどの職業観念へとおよんでいく。そうであれば、ジンメルの『貨幣の哲学』初版の第六章第一節は、この論文の分析視角の中心を決定づけるような刺激をおよぼしたと考えられる。そうした意味で、これまたたしかな証拠はないけれども、ジンメルは、病気回復後のウェーバーに大きな影響をあたえたと推断してもよいのではないだろうか。

5. 二人の影響関係

すでに示したように、晩年のウェーバーはジンメルを公然と批判してはばからなかった。それにもかかわらず、かれはジンメルを評価していたし、かれから多くの養分を吸収して偉大な社会学者になっていった。それにたいし、ジンメルはウェーバーの批判に反応を示さず、うけ流すだけだったといってよい。また、ウェーバーからの影響を明確に物語っているようなジンメルの論述もみあたらない。ジンメルは社会学者であると同時に、いやむしろ社会学者である以上に、生の哲学者であった。ウェーバーが歴史や生活の事実を重要視した人であるのにたいし、ジンメルは、四歳年少の森鷗外の表現を用いれば、「平凡な日常の生活の背後に潜んでいる象徴的意義を体験する、小景を大観するという処」のある人（11：182）であった。だからウェーバーの批判を真正面からうけて論争しても、生産的ではないと考えていたのだろう。

ウェーバーによると、Berufは「純粹に宗教的な概念」であり、「神による永遠の救いへの招き（Berufung）」を意味していたにすぎなかった。それが、ベン・シラの知恵の翻訳で、ルターがArbeitとすべきところをBerufと訳していらい、世俗的な「職業」をも意味するようになった（5：66）。ユダヤ人であるジンメルは、ルター派の洗礼をうけていたのだからこのことを知っていたにちがいない。それにしても、なぜ1907年の第二版で、ほぼ1ページ半にもおよぶ補筆をおこない、わざわざ「職業」について補足説明まで加えたのだろうか。脚注などほとんどつけないのがジンメルの流儀だから、ウェーバーの名前など出てくるはずがない。しかし、『貨幣の哲学』のこの個所にかんするかぎり、どうもウェーバーの影響をうけたようにおもえてならない。もしかしたら、ウェーバーがルター派の敬虔感情には、カルヴィニズムの教説がもっていた「例の、持続的な自己審査と一般に自己の生活の計画的な規制への起動力」（2：38）が欠如していたと価値自由の立場から述べていたような個所も、Berufをジンメルなりに説明させる刺激剤となったのかもしれない。

ところでジンメルは、プロテスタンティズムの倫理にかんする論文が発表された翌年、つまり1906年に『宗教』（G. Simmel, *Die Religion*, 1906）を公刊している。その第二版は1912年に出ているけれども、かれはその初版で、キリスト教において暗示されている「魂の救済」にとって固有なのは「われわれのもっとも深い人格性の彫琢」、自我の法則にしたがって「自己を十分に生かすこと（Sich-Ausleben）」であって、これが同時に、「神の意志」への服従を意味していると解している（9：63）。そしてかれはさらに、人びとがキリスト教の救済概念の「完全な個人主義」

を誤認し、すべてのものに統一的な理想を求めることによって、「各人が自分の才能を生かすべきである」ことを誤解したと嘆く。プロテスタントとしてのジンメルは、『貨幣の哲学』の第二版を出版する前年に、救済をこのように人格の完成や自己実現ととらえていた。だからかれは、さきの「職業」のあとに *Berufensein* を挿入し、そこに補足の説明を書き入れたのではないか。この可能性も十分に考えられよう。

ちなみに、「世界の呪術からの解放」(*Entzauberung der Welt*)というウェーバーの有名な言葉についていえば、それは、1905年の論文にはみあたらず、エートスという言葉と同様に『宗教社会学論集』に収録されるときに書き込まれたものである。この点、すでにジンメルが1906年の『宗教』において、「価値あるものの救出、いわば呪術からの解放(*Entzauberung*)としての魂の救済」(9: 63f.)の解釈について論じていたことは、何とも興味深いかぎりである。

いまや書物が売れない時代になった。わたしは軽率な確信のもとに誤った推測をしてしまった。もしもわたしの本が増刷されるようであれば、ぜひここで書いたように訂正したいとおもう。そのときに、自責の念から解き放たれるのだろう。はたして、それまで生きていられるものかどうか。

引用文献

- 1 : M. Weber, Die protestantische Ethik und der „Geist“ des Kapitalismus, in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 20. Band, 1905.
- 2 : *Ibid.*, 21. Band, 1905.
- 3 : M. Weber, Georg Simmel als Soziologie und Theoretiker der Geldwirtschaft, 1908, in: *Simmel Newsletter*, Vol. 1, N° 1, 1991.
- 4 : M. Weber, Ueber einige Kategorien der verstehenden Soziologie, in: *Logos*, IV, 1913.
- 5 : M. Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. I, 1920, 5. Aufl., 1963.
- 6 : M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1921–1922.
- 7 : Marianne Weber, *Max Weber. Ein Lebensbild*, 1926.
- 8 : G. Simmel, *Philosophie des Geldes*, 1900.
- 9 : G. Simmel, *Die Religion*, 1906.
- 10 : G. Simmel, *Philosophie des Geldes*, Zweite, verm. Aufl., 1907, in: David P. Frisby und Klaus Christian Köhnke (Hg.), *Georg Simmel, Philosophie des Geldes; Georg Simmel • Gesamtausgabe*, hg. von Otthein Rammstedt, Band 6, 1989.
- 11 : 森鷗外『青年』(雑誌『スバル』掲載, 1910–1911)新潮文庫, 1948.
- 12 : 岡澤憲一郎『マックス・ウェーバーとエートス』文化書房博文社, 1990.
- 13 : 岡澤憲一郎『ゲオルク・ジンメルの思索 — 社会学と哲学 —』文化書房博文社, 2004.

追記：本文のドイツ語のうち、*Varianten*の日本語訳については、名古屋学院大学外国語学部 山本淑雄准教授から有益な示唆をいただいた。上記の文献のうち、11は、名古屋学院大学商学部の林淳一准教授からおくられたものである。両氏に厚く感謝申し上げる次第である。